



# シャーロック・ホームズの冒険

作 佐藤 良士

人物

ホームズ      シャーロック・ホームズ

ワトソン      ワトソン博士

ハドソン      ハドソン夫人

探偵      若き日のホームズ

令嬢      エリザベート・アスカレル

夫人      アスカレル夫人

男爵      ガゼボン男爵

道化

時・場所

シャーロック・ホームズが活躍していた頃のイギリス

## 1 ベーカー街

おそらくは十九世紀の終わりごろ。

ロンドン、ベーカー街。

深く霧の立ち込める晩秋の朝。

幕が上がるとそこは、シャーロック・ホームズの書斎兼居間、椅子とソファ、テーブル類の小道具が置かれている。

部屋の中央で二人の男がフェツシングをしている。名探偵シヤールック・ホームズと親友のワトソン博士である。二人ともネクタイを外したワイシャツに吊りズボンスタイル。動きは緩慢だが、真剣に剣を交わしている。

部屋がノックされ、ハドソン夫人がお茶の支度をして部屋に入ってくる。

ハドソン まあ、大きな音がすると思ったら、朝から剣術のお稽古。

ホームズ やあ、ワトソン君、休憩にしようじゃないか。ハドソンさんのおいしいお茶はどうだい。

ワトソン いいねえ。もう僕は息が上がって、今、お茶にしてみらおうかと思っていたところなんだ。

ホームズ そうだろう。ハドソンさんのお茶はいつも僕たちの気持ちを知っているんだ。

二人は自分の椅子にかけ、ホームズはさっそく葉巻に火を入れる。ハドソンさんが、二人にお茶を配り、自分もお茶を持ってソファに座る。

ワトソン ホームズ、君はまったく衰えを知らないよ。僕なんか、

もう君のお相手は荷が重くなってきたようだ。

ホームズ いや、久しぶりにワトソンがきてくれたので張り切ったのさ。

ハドソン 本当に、ワトソンさんがこのお部屋にいらっしゃるのは久しぶりだわ。お医者様はそんなにお忙しいの。

ワトソン ええ、僕だけじゃありませんよ。今、ロンドンにいる人たちは、誰も彼もが驚くほど忙しいんですよ。

ハドソン まあ、どうしてなのでしょう。

ホームズ それもこれも、あの万国博のせいだよ。今、ロンドンの子の話題といえば、誰も彼もが万国博だ。

ハドソン 本当にあのクリスタル・パレスは素晴らしいわ。あんな大きなガラスの建物なんて見たことはなかったわ。

ワトソン わが大英帝国の技術の勝利ですよ。そうだろう、ホーム

ズ、この国は、今世界一になるうとしていているんだよ。

ホームズ それは大変じゃないか。でも僕が愛しているのは、この街の古い建物やちよつといかかわしい路地裏さ。そこにはこの町に住む人々の優しさがああり、世論があるよ。この町があまり忙しくなるのは、僕には有難いことではないね。

ワトソン それはそうと、ホームズ、君はもう万国博に行ったのかい。

ホームズ いや、まだだよ。もつともそんな時間があれば、僕はこの部屋で君の書いた「シャーロック・ホームズの冒険」でも読んでいる方が楽しいさ。

ハドソン さあ、さあ、難しいお話はそれぐらいにして、ワトソンさんに静かな時間とおいしいお茶を差しあげましょう。

ワトソン そうだ。今日は早起きをしたので、新聞を読んでないんですよ。僕は朝はタイムズを読みながらお茶を頂くことにしているんです。

ハドソン ええ、そうだろうと思って持ってきましたよ。(タイムズをワトソンに渡す)

しばらく静かな時間が流れる。新聞を読むワトソン。葉巻を楽しむホームズ。二人を見ながらお茶を飲むハドソン夫人。

ホームズ どうだい、ワトソン、何か面白い記事は載ってるかい。

ワトソン 最近は君の推理欲を喚起させるようなをわくわくさせるような記事にはお目にかからないねえ。

ホームズ そうだろうねえ、おかげで僕はこうして葉巻を楽しめるというわけだ。

ワトソン これは驚いた。大事件だ。リンカーンが暗殺されたよ。

ハドソン まあ、大変、世界がまっくらになってしまっわ。

ワトソン これはどうだい。エジソンが白熱電球の特許をとったぞうだよ。

ハドソン まあ、よかった。これで世界が明るくなるわ。

ワトソン おや、ここに、ガゼボン氏が亡くなったことが載っているよ。ほら、ゲレの町をイギリスー、いや世界一の紡績の町にした実業家だ。

ホームズ (驚いて) 何だって、ガゼボン氏が亡くなったって。

突然、ホームズが立ち上がり、葉巻を手に部屋の中を歩き回る。

ワトソン どうしたんだ。君はガゼボン氏に面識があったのかい。

ホームズ いや……、そう、遠い昔のことだがね。そういえば、ワトソン君、君は僕の新しい冒険の話を書きたがっていたね。

ワトソン うん、出版社から頼まれているのだ。でも最近君はずいぶん暇なんだろう。

ホームズ ひとつだけ、ないこともない。  
ワトソン それは是非聞きたいものだ。僕の知らない事件のようだな。

ホームズ 勿論だよ。君と僕がまだ知り合う前さ、僕はまだオックスフォードの学生だったころだよ。

ワトソン 何という事件なんだ。

ホームズ ジャン・アスカレル、そう、あれは「ジャン・アスカレル事件」だ。

溶暗。

## 2 ゲレの村

探偵（N） それは、まだシャーロック・ホームズが名探偵として世間に知られるようになる前のことだ。

ロンドンの大学にいた僕は、親友のジャン・アスカレルの突然の死を、彼の姉君の手紙で知らされた。死の半年前に、彼の故郷、ゲレの村に帰っていたジャンは、不幸な事故で短い生涯を終わっていたというのだ。

事故は北イングランドの荒涼としたヒーズの丘で起こった。ゲレの村の小領主の末裔だったジャンを突然襲った不幸とはどのようなものか、事故の正体は何なのか、ジャンの死は僕には只の事故とは思えず、これには巧妙に仕組まれた犯罪のにおいがした。真実を求めて、僕がゲレの村に向かったのは、それから1週間ほどあとの、初夏のことだ。

## 3 道化

北イングランドの荒涼とした風景の中に不気味な塔がある。おそらく中世のころは城として使われていたと思われる塔は、ある時は領主の館として、ある時は領主の牢獄として使われていたに違いない。

シャーロック・ホームズが塔を見上げています。ホームズは航海で使うような測量器を持って、塔の高さを測ったり、野原を行ったり来たりしながら、付近の調査をしている様子。道化が登場。ホームズの後ろを回って帽子を取ろうとするが、まるでホームズは道化の動きが分かっているように、サツと避けて横にいく。もう一度道化が帽子を取ろうとすると、ホームズが逆に道化の帽子を取って空に放り上げる。道化がわてて帽子を追いかける。

道化 (帽子をひらつて) お前は誰だい？

探偵 (道化を無視して塔をみている)。

道化 お前は誰だい？

探偵 (道化を真似て) お前は誰だい。

道化が驚いて、探偵を観察するように舞台を回りながら、

道化 チチツ、チチツ、チチツ、チチツ、

探偵 ヒヨドリかい？

道化 キュルキュル、キュルキュル、

探偵 シジュウカラだ。

道化 ピーヨイヨ、ピーヨイヨ、

探偵 訳ないさ、ホオジロだろ。

道化 ヒューイ。

探偵 キジバトもいるのかい。

道化 そりゃあいるさ。ここには何だっているさ。リスだって、ウ

サギだって捜せばきつとみつかるよ。

探偵 狼や熊もいるのかい。

道化 狼や熊は、知らないが前には大鹿がいたんだぜ。

探偵 大鹿はどうしたんだ。今はいないのかい。

道化 大鹿は、地主さまが退治されたんだ。

探偵 地主さまだって、それはアスカレル伯爵のことかい。

道化 バカ言ってるよ、地主さまは男爵さまにきまつてるじゃない

か。

探偵 男爵、男爵さまというのはガゼボン男爵のことを言っ

てるんだな。君は。

道化 お前は誰なんだ。このへんじゃ見かけない顔だな。

探偵が親しそうに道化に握手を求めて

探偵 失敬、失敬、僕はシャーロック・ホームズだ。君は、

道化は驚いて、後づさりながらオズオズとホームズに手をさしだし握手するが、すぐに手を離してしまう。

探偵 どう見たって道化だな。何だってそんな格好をしてるんだ。

道化 おいらは道化じゃないぜ、羊飼いだ。でもみんなはおいらのことを道化っていうんだ。

探偵 でも君は随分物知りのようじゃないか。

道化 そうだよ。俺ら物知りだよ。お前変わってるな。誰も俺らを物知りなんて言わないよ。みんな道化はバカだって思ってるんだ。

探偵 バカなもんか。君は物知りで利口じゃないか。

道化 そうだ。俺らは利口で物知りだよ。でもシャーロック・ホームズはもっと利口で物知りなのさ。ジャンがそう言ってたよ。

探偵 ジャン！、ジャンだって、ジャン・アスカレルのことかい。

道化 あたり前さ、ジャンはジャンさ。ジャン・アスカレルさ。

探偵 君はジャン・アスカレルを知ってるのか。

道化 あたり前さ、俺らはジャンの友達だもんな。

探偵 でも、もうジャンは居ないんだろう。

道化 この前の満月の夜に死んだんだ。

探偵 ブナの木から落ちて死んだんだろう。どうしてブナの木なんかに登ったんだ。

道化 ジャンは落ちてなんかいないさ。

探偵 僕は村の人たちに教えてもらったんだ。(指差して)ほらあそこだろう。確かに大きな枝が折れていたよ。

ホームズがブナの木を指さす。すると道化は同じような格好をするが、道化が指さした先には塔がある。

道化 違うよ、落ちてなんかいないさ。

探偵 (不思議そうに)君は何が言いたいんだ。

道化 ジャンは登ろうとしたのさ。登ろうとして悪魔に嫌われてしまったのさ。

探偵 登ろうとしたんだって！、(塔に気づいて)そうか、君はジャンがああ塔に登ろうとしたと言ってるのか。

道化 俺らは何にも知らないよ。

探偵 本当にジャンはあの塔に登ろうとしたのかい。

道化 ジャンは小さいころから言ってたよ。大人になったらあの塔に登って自分の目で見ると。自分の目で自分の土地を見るんだって。

探偵 ジャンは悪魔に嫌われて塔に登る途中で落ちてしまったのか

い。

道化 そうだよ。悪魔は火は嫌いなんだ。

探偵 火だつて、火がどうしたつて。

道化 火を持って悪魔に近づく人間は殺されてしまうのさ。

探偵が考えながら塔を見上げている。

探偵 あの塔には、頂上に登れる階段があるんだろう。

道化 でもいつも扉がしまっている。扉の鍵は地主さまでなければ

あけられないよ。

探偵 階段を使えないとするとジャンはどうして登っていったんだろう。

道化 満月の夜には勇気のある牡鹿は空に飛び上がろうとするもんだよ。でも牡鹿も地主さまの腕にはかなわなかった。

探偵 地主は狩の名人なのかい。

道化 大鹿でも地主さまにはかなわないさ。それに地主さまは賢い

お方だ。大鹿と牡鹿の次に狙っているのは、かわい雌鹿だよ。

見ていてごらん。地主さまのことだ。手ばかりなく雌鹿を捕まえて自分のものにしてしまうよ。

暗転

#### 4 アスカレル夫人

ゲレの村のかつての領主、アスカレル家の居間。中央奥に大きな窓があり、ソファと椅子が居間の中に置かれている。窓に向こうに塔が見える。

部屋の中央で一人の青年が立って、窓の向こうの塔を見つめている。青年はニッカーズボンにハンチング帽の旅行姿で、窓の向こうから聞こえてくる子供たちの歌、グリーンスリーブスの合唱に耳を傾けている。

アスカレル夫人が登場。突然、青年に向かって声をかける。同時に子供たちの歌は聞こえなくなる。

夫人 ジャン、あなたなの、帰ってきたの。

驚いて、夫人を見る青年。

夫人 いいえ、違うわ。ジャンはもういないんですもの。帰ってくるなんてありえないわ。それにジャンはあなたより背が高いわ。  
探偵 ええ、ジャンは僕より高かったですよ。足も速くてフットボールの選手でしたからね。

夫人 まあ、あなたはあの子をご存知なの。

探偵 大学の寮で同じ部屋でしたよ。

夫人 (窓の外に向かつて) エリザベト、子供たちは帰ったの。まだならもうおしまいにしておちらの部屋にいらつしゃい。ジャンと大学が一緒だったという方…… (青年にむかつて) 何というお名前？。

探偵 僕ですか、ホームズです。シャーロック・ホームズ。

夫人 ホームズさんが見えよ。

夫人の声の途中で、上手からエリザベトが登場する。

令嬢 分かっているわ、お母様、この部屋で待つて頂いたのよ。

夫人 そうだったの。エリザベト、あなたまだあの工場の子供たちに歌を教えているの。

令嬢 ええ、私の教えているのはこの地方の古い歌だけど、子供たちは歌が大好きなのよ。お母様。

夫人 あの工場は男爵が作ったのよ。ジャンを殺した男爵の工場よ。令嬢 お母様、また、そんなこと。ホームズさんが驚かれるじゃないの。(ホームズに) ごめんなさい。ホームズさん。

探偵 (微笑んで) ジャンはシャーロックと呼んでましたよ。

夫人 シャーロック、よくいらしたわ。遠いところを。ロンドンからいらしたの。

探偵 ええ、ここは本当に美しいところですね。いくつもの丘を馬車を超えるたびにジャンの話の思い出しましたよ。それからさっきの歌もね。

令嬢 あの歌、ジャンもよく歌ってたていたわ。

夫人 本当に、まだ子供の頃だけど。

令嬢 私たちお父様に馬車に乗せてもらって、あの歌を歌いながら、よく出かけたわ。春はヒバリの鳴く麦畑で、夏は大きなブナの中の木陰で、秋にはどこまでも続くヒースの丘で、そして冬は雪の中をキツネやウサギを捜しに行くの。

夫人 あなたやジャンがまだ子供のころは、この窓から見えるすべての丘も林も私たちのものだったのよ。

令嬢 お母様、覚えている。私たちがエーデルワイスの捜しっこをしたのを。エーデルワイスを見つけた数だけいいことが起きるって。私もジャンも夢中で捜したわ。

夫人 でも、あれから起きたのは悪いことばかり。

令嬢 私はそうは思わないけど、お母さま、それは神様がお決めになることよ。

夫人 でも、今日はいいことがあったわ。久しぶりね。私たちのところにお客様があったのは。それもジャンのお友達。ねえ、シャーロック、あの子のことをお話したいわ。そうだ。ご馳走の用意をしなくちゃ。今日は出来るだけ楽しい夕食にしましょう。(ソファを指して) さあ、そこへかけてゆっくりして頂戴。

言いながら、夫人は部屋を出て行く。ホームズとエリザベトは向かい合ってソファに腰を降ろして。

令嬢 私、ジャンにいつも聞いていたのよ。

探偵 何をですか。

令嬢 シャーロック・ホームズは天才だって。

探偵 驚いたな。僕が天才ならジャンは大学一の秀才ですよ。彼はホームズからシエクスピアまで古今の古典に関しては、教授にも負けない知識を持っていましたからね。

令嬢 あなたは始めて出会った人の職業や性格がすぐにわかるんですって。シャーロック、あなたから私はどのように見えて?。

探偵 母上にお会いしてわかりましたよ。あなた方を襲った不幸がどんなに大きかったか。

令嬢 それはそうよ。お母様にとっても私にとってもジャンは大切な家族でしたからね。

探偵 でも、あなたはそれでも強く生きようとしている。さっきの歌を聞いて僕にははつきりわかりましたよ。

令嬢 あなたは素直ないい方ね。

探偵 ……。

令嬢 ジャンが死んだなんてまだ信じられない。ジャンが殺されたなんて信じたくない。だから、明るく振舞っているだけかもしれない。

探偵 あなたもジャンは殺されたと思ってらっしゃるんですか。

令嬢 (窓の外を指さして) ジャンは……、ジャンはあの塔に殺されたんだわ。(突然、頭を抑え、恐れるように膝の上に顔を埋める)

舞台が暗くなり、窓の外の塔が浮かび上がる。

探偵 あの塔が……、塔がジャンを殺したというのですか。

令嬢 (顔を上げて) ジャンは塔につかれていたんです。あの明る

く優しかったジャンが、半年前に帰って来たときから人が変わったようになっていたのです。あの塔に登ることだけがジャンの生きる支えになっていたのです。

探偵 あの塔の上には何があるんだろう。

令嬢 あの塔はアスカレル家の呪いなの。アスカレル家のためにあの塔に幽閉されて死んでいった人たちの恨みがこもっているんです。だから私はもちろん、ジャンだって恐ろしくて近寄ったこともなかった。

探偵 あの塔には登れるんですか。

令嬢 前は登れたそうだけど、何年か前にガゼボン男爵が入り口を閉鎖して登れないようにしてしまっただけです。男爵もあの塔の呪いを恐れていたんだわ。(激して)ジャンもあの塔に登るってなんて考えたりしなかったら、死なずにすんだんだわ。

探偵 落ち着いて、警察の調査ではジャンは事故で死んだことになってるんですかね。

令嬢 そうなんです。あの朝、ジャンは塔の下で倒れていたんです。私たちがジャンを発見した時はもう手遅れだったわ。ジャンは頭の骨を折って死んでいたんです。そして、ジャンの死体の上には悪魔の大きな手のように、ぶなの木の枝が折れて垂れ下がっていたのです。

探偵 ジャンはそのぶなの木に登って、自分の重みで枝が折れてしまったために、転落したというわけですね。

令嬢 警察の刑事さんはそういつてましたわ。

探偵 どうも不思議だなあ。僕にはわからない。夜中にジャンが一人でぶなの木に登るなんて、どうしてそんなことをしたんだろう。令嬢 最近のジャンを見ていたら、ありえないことではないんです。ジャンはあの塔に取り付かれていたんです。何とかして塔に登りたいと、そればかり考えていましたから。

探偵 先ほど、お母様はジャンは殺されたって言っていましたね。

令嬢 母は、誰かのせいで枝が折られてジャンが死んだと信じているんですわ。

探偵 枝が折れていたからって、ジャンが殺されたとはいえないでしょうね。

夫人 (突然、大きな声で) 銃声よ。

夫人が部屋に入ってきて、エリザベートの横に腰を降ろす。

夫人 エリザベート、あなたもはつきり聞いたわね。あの日の夜明け頃、私たちの眠りを覚ましたあの恐ろしい音が、あの銃声が何

よりの証拠。ジャンはガゼボン男爵に殺されたのよ。

令嬢 でも、折れた枝にもジャンの身体にも、銃で撃たれた痕はなかったと警察は言ってたわ。

夫人 あの男なら警察を騙すぐらいわけはないわ。十年前にあなたのお父様が殺された時もそうよ。

令嬢 お父様は病気でなくなつたのよ。お母様。

夫人 何を言ってるの、あなたのお父様はあの男の一族に騙されたのよ。騙されて私たちの美しい土地を奪われたのよ。お父様の病気はそれが原因、ガゼボン男爵がお父様を殺したのよ、

夫人が窓の外を塔を激しく指差して

夫人 私は騙されないわ。男爵があつた塔の扉を閉鎖したのが何よりの証拠。男爵は、あの塔の祟りを恐れて塔の入り口を閉ざしたんだわ。

令嬢 お母様、それ以上仰っては。

夫人 私たちの土地を取り上げ、屋敷を取り上げ、それから、あの男の父親は恥知らずにも、私に結婚を申し込んできたのよ。

令嬢 結婚ですって。

夫人 そうよ。エリザベート、あなたも気をつけなさい。あの男の物欲しげな嫌らしい目付き。あの恥しらずの子供だもの、何をやるかわからないわ。

令嬢 お母様、私は昨日、ガゼボン男爵に結婚を申し込まれたわ。

夫人が立ち上がり、ホームズが驚いてエリザベートを見る。

夫人 (驚きの声で) それで、それであなたは何と答えたの。

令嬢 まだ、何とも、でも私は迷っているのです。ガゼボン男爵はお母様のいうような人ではありませんわ。少なくともこのゲレの村には必要な人よ。私にはわかるの。この村は今大きく変わろうとしているのよ。

夫人 ばかなことを言つて。あなたは私たちの恨みを、お父様の恨みを、ジャンの恨みを忘れたの。

探偵 ねえ、シャーロック、教えて、ジャンは男爵に殺されたの。それとも警察のいうように事故だったの。

夫人 そうだわ、あなたがガゼボン男爵と結婚する。それもいいかもしれないわ。間違いなく今ではあの男はこの村の地主。私たちに昔の栄光はない。けれど、あなたがあの男と結婚して子供を産めば、その子はアスカレル家の血を受け継いでいるんだわ。間違いなくアスカレル家の栄光は受け継がれるんだわ。この村が

どう変わろうと、そんなことは私には関係ない。アスカレル家の血を受け継ぐものがこの土地の支配者になれば、それが私たちの願いなのだから。

暗転。

## 5 エリザベート

ヒースの原。朝。塔の見える丘でエリザベートが野の花の写生をしている。ホームズが登場。エリザベートの横に座ってバスケットの中の絵を眺めている。

令嬢 （絵を描きながら）だめよ。私の絵に勝手にさわっては。

ホームズが驚いて手を引つ込める。

令嬢 （ホームズに気づいて）あら、ごめんなさい。私、道化かと思ってしまったわ。

探偵 道化だって。あの羊飼いの？

令嬢 ええ、あの子は私の絵が大好きなの。

探偵 あなたは花の絵が好きなんですか。

令嬢 もちろん、花や木を描くのは楽しいわ。でも私はこの丘に生きていく動物達を描くのはもっと好き。みんな私の友達なのよ。

探偵 それは素敵だな。こんな寂しいヒースの丘にも動物たちは住んでいるんだ。

令嬢 あら、シャーロック、あなたは人間以外の動物にも興味がある。あり。

探偵 もちろんですよ。こう見えても動物学者を目指していたジャンの親友ですからね。

令嬢 私の動物の絵を見て道化がお話を作ったの。それがとても面白いお話なので、子供たちに見せたらとっても喜んだわ。タイトルはね「ピーター・ラビットと仲間たち」っていうの。ピーター・ラビットというのは主人公のうさぎのことなの。

探偵 きっと、そのお話しは世界の子供たちが読むようになるかもしれないな。

その時、鐘の音が聞こえてくる。

探偵 あれは何の鐘だろう。

令嬢 え、聞こえてくるの、あなたには。

探偵 ええ、聞こえますよ。小さな音だけど。

令嬢 あの鐘はあなたには聞こえても、私には聞こえない。

探偵 どうしてですか。

令嬢 ガゼボン男爵の工場の始まる鐘だからよ。アスカレール家の人間には決してあの鐘の音は聞こえないのよ。

探偵 ……。

令嬢 ねえシャーロック、教えて。ガゼボン男爵の工場は、この村の人たちに幸福をもたらすの。それとも不幸をもたらすの。

探偵 あなたはどう思うんですか。

令嬢 あの工場が出来て、確かにこの村は豊かになったわ。町からたくさんの人が来てにぎやかになっていった。でも私は何だか恐ろしいことが起こるような気がするの。あの工場が私たちにもたらすものは幸福だけとは限らないような気がするの。

探偵 あなたも、この土地をガゼボン男爵家に奪われたことを恨みに思っているんですか。

令嬢 いいえ、私はお母様とは違うわ。アスカレール家の栄光は昔のことよ。もう私たちには必要なものではないわ。シャーロック、私はこの土地を離れようと思うの。やっぱり、男爵との結婚なんて、どうしても私には考えられないわ。

探偵 ここを離れてどうするんですか。

令嬢 ロンドンに行くの。そこで本を作るの。私の絵とお話で本を作るのよ。ピーター・ラビットの絵本よ。そして、その本を世界中の子供たちに配りたいのよ。

エリザベートがホームズの持っているバイオリンに気が付いて、

令嬢 あら、そのバイオリン。

探偵 ええ、ジャンの部屋にあったのです。

令嬢 シャーロック、私にあなたのバイオリンを聞かせて。

ホームズが静かに「グリーン・スリーブス」をバイオリンで引き始める。エリザベートが立ち上がって、バイオリンに合わせて歌う。

私の愛する美しいふるさと

それなのにわたしはあなたを捨てた

今はなつかしい思い出となって

私のところに届けられる

グリーンスリーブス 私の喜び

グリーンスリーブス 私のあこがれ

グリーンスリーブス 私の魂

ああグリーンスリーブス あなたに会いたい

## 6 ガゼボン男爵

男爵、ジャージ・カゼボンの館。

居間。上手奥のカベには狩猟好きの男爵の収集品の猟銃が数丁架けられている。下手奥の壁には小さな窓があり、ぶなの木が見え、その後ろに塔がある。

シャーロック・ホームズが部屋の中央で壁にかけられた猟銃のコレクションを見ている。男爵が登場。

男爵 気に入ったかね。

探偵 やあ、すばらしいコレクションですね。

男爵 猟に興味があるのかね。

探偵 ええ、でも僕はむしろ銃に興味があるほうですね。

男爵 ほう、射撃に興味か。そういえば、今ロンドンの若者たちの間ではクレイ射撃が流行しているそうだね。君もそのほうかね。

探偵 いいえ、僕が関心があるのは銃が引き起こす歓迎されざる出来事といったらいいかもしれませんね。

男爵が少し理解出来ないというようホームズを見つめる。ホームズが壁に近づき銃の一つに手を伸ばして、

探偵 やあ、これは素晴らしい。最新鋭のウインチエスターだ。これなら、塔にいる人間でも打ち落とせるかもしれない。

男爵 気をつけるがいい。それには、実弾が入っている。

探偵 本当ですか。じゃあ、ここから狙って撃つたりもするんですか。

男爵 めったには撃たないよ。

探偵 でも時々は撃つんだ。

男爵 もちろん威嚇だけだね。密猟者よけだよ。

探偵 そりゃ、そうでしょう。でも驚いたなあ。僕はまたうさぎか狐かと思っていたら、人も撃つたりするんですか。

男爵がイヤな顔をしてホームズから銃を取り、壁にかける。その後、親しみを込めてホームズに近づき……。

男爵 ホームズ君。話はアスカレル嬢から聞いているよ。ジャンと同じ大学だそうだね。

探偵 ええ、でも、一緒だったと言つべきでしょう。

男爵 そうだったね。ジャン・アスカレルはもうこの世にはいない。

探偵 いい奴でしたよ。フットボールとシエイクスピアのスターだった。

男爵 シエイクスピアのスターだって。

探偵 ええ、彼は演劇をやっていたんです。

男爵 そうだったのか。ジャンはこの夏に帰郷してからしきりと私のところにやってきて、夢のようなことを言っていたが、それもシエイクスピアの影響なのかね。

探偵 あなたの父上がジャンの父上から、アスカレル家の領地と屋敷を騙し取ったということですか。

男爵 そうだ、どうして彼がそんな妄想を抱くようになったのか私にはわからないがね。

探偵 でも、それは何の証拠もない。あなたの父上は正当な方法でこの土地をジャンの父上から譲り受けられた。事業に失敗されたジャンの父上が負われた借財の代償として。

男爵 そうだとも、もちろん法律上の手続きも何の疑問もない正当なものだ。

探偵 それから不幸にもジャンの父上は失意のうちに病で泣くなられた。そして、この土地を受け継いだあなたは立派に事業を成功させ、今は名実ともゲレの村の領主だ。僕が知っているあなたとこの土地についての知識はこんなものですが、どうでしょう。

男爵 立派だよ。ホームズ君。その通りだよ。

ホームズが窓に近づいてぶなの木を指差しながら。

探偵 あの木の下、いや塔の下ですね。ジャンが転落して死んだのは。

男爵 ジャンは精神を病んでいたようだね。

探偵 どういうことでしょう。

男爵 しきりにあの塔に執着していたようだよ。たぶんアスカレル家の象徴だったあの塔が、青年になったジャンの心に何かを訴えたのかもしれないがね。

探偵 例えば、ジャンのお父上とあなたの父上の真実といったような。

男爵 真実は、今君が言ったとおりじゃないのかね。

探偵 ジャンはそうは思っていないかった。もっと別の真実が隠されていると思っていた。そしてそれはあの塔の上に隠されていると、男爵 ジャンの妄想だ。

探偵 警察の調べではあの木に登ったジャンは、自らの重みで枝が折れて転落したということでしたね。

男爵 不幸な事故だった。

探偵 でも、他のことも考えられないでしょうか。例えば誰かの意図が、ジャンを支えたものを撃ち砕いたとか。

ホームズが壁から先ほどの銃を取り、窓に近づいて照準し、発射する。大きな射撃音が乾いた部屋の中に不気味に響く。

探偵 (明るく) やあ、これは素晴らしいぞ。あれに命中するなんて、どうです。この銃声が全ての真実を語ってくれたとは思いませんか。

男爵 …… (窓の外を見る)

探偵 (窓の外を指指して) ほら、ごらんなさい。あの塔の上を、あのテラスの端を、僕の銃弾がきれいにテラスの金具を吹き飛ばしたのが見えるでしょう。

男爵 何だって、君は木の枝を狙ったんじゃないのかね。

探偵 違いますよ。僕が狙ったのはあの塔ですよ。そしてあの夜、ジャンの命を奪った人物が狙ったものもあの塔のほうですよ。

男爵 私が、私の銃がジャンの命を奪ったというのかね。

探偵 そうです。

男爵 君の言っていることは、私に対する重大な冒瀆じゃないか。探偵 僕の言っていることが真実なら、人々は冒瀆とはいわないですよ。

男爵 君の意見が、それほど断定的になっているとは知らなかった。探偵 (力強く) 断定的です。

ホームズが銃を戻し、ゆっくりと男爵に向き直る。

男爵 しかし、君の意見は全くの不完全だよ。どうしてジャンはあの塔に登ろうとしたのかね。

探偵 登ろうとしたんじゃないやありません。降りようとしていたんです。男爵 降りようとしていた。じゃあ、ジャンはあの塔に登ったのかね。

探偵 そうですよ。

男爵 君の言っていることは正気とは思えない。あの塔を見たまえ、中腹までは木の枝に覆われているが、その上は何もない。もちろん中の階段は入り口が嚴重に封印されて、獣でさえ入ることは不可能だ。神の奇跡でも期待しなければ塔に登ることは不可能だよ。

探偵 神の奇跡が起こったのです。

男爵 何だつて、神だつて、オックスフォードの大学生は神の奇跡を信じるのかね。じゃあ、海が割れてモーゼがエジプトを逃れたことも、ソドムとゴモラが天の火で滅びたことも神のなした業だとみとめるのかね、

探偵 自然現象という偶然が、神の奇跡の正体だということを僕たちは知っていますよ。例えばモーゼの奇跡が海潮の満ち欠けで起こったことで、ソドムとゴモラの天の火がカミナリだとしたら、それは十分に科学的な根拠を持った真実といえるでしょう。そして、今日では科学が起こす偶然が奇跡を作り出すということも。

男爵 あの夜、君のいう科学が神の奇跡を生んだのかね。

探偵 そうです。僕は聖書のかわりにタイムズで神の奇跡の正体を知ったのです。タイムズは伝えていきます。あの夜、飛行船がこの地方の上空で夜間飛行を行なったことを。そうしてこの村の上空に差し掛かった時、ちよつとしたトラブルが起こったことを。飛行船から長いロープが投げられたことを、それが、ちよつどあの塔の屋根にひっかかって、ハシゴのように延びたことを、星の観察をしていたジャンがそれを見つけたことを、そしてこれらの偶然が起こした神の奇跡を伝わってジャンが塔に登り、封印されたあなたの父上の秘密を見つけたのです。

男爵 父の秘密、それは何なのだね。

探偵 この土地の権利をアスカレル家に返還されるという公的証書です。

男爵 (突然、激して) ウソだ!。君はでたらめを言っている。何の証拠があつて、君はそのようなでたらめを言うのだ。

探偵 証拠なら、これだ。これが動かせぬ証拠だ。

言いながらホームズが懐から紙片を取り出し、男爵に示す。

探偵 あなたの父上は亡くなる前にこの土地をアスカレル家に返還されることを決意され、公証人を通してこの書類を作成された。おそらく主筋にあたるアスカレル家に対して犯した罪を償う気になったのです。しかし、この土地に執着したあなたは、この証書を公にすることなくあの塔の上に隠したのです。これを焼き捨てなかったのは、あなたにまだ良心が残っていたからでしょう。

男爵が力なくホームズのほうに歩み寄る。

男爵（紙片を見ながら）どうして、それを。ジャンは何も持っていないかったのに。私はジャンの死体を詳しく調べたのだ。

探偵 これを僕はあの丘で見つけましたよ。たぶん偶然という神が、落下するジャンのポケットからこの紙片をあなたのみつからない場所に隠したのでしょう。

しばらくにらみ合う二人。やがて男爵が観念したように。

男爵 君の勝ちだよ。ホームズ君。君のことだ。もう警察には手配したんだろうね。明日のタイムズの記事が私には見えるようだよ。天才探偵、紡績王の悪事を暴くとね。

探偵 いいえ、そんなことはしません。だって、あなたの罪はこのゲレの村を豊かな紡績産業の町に育てたことで、十分に償われている。あなたのアスカレル家に対する紳士的な態度は、夫人も令嬢も感謝しておられますよ。

男爵 しかし、私はジャンを殺した。

探偵 ジャンを殺したのはあなたではない。

男爵 どうしてかね。君は今、そのことを暴いてみせたではないか。

探偵 あの夜、神はもうひとつの偶然を仕組んでいたのです。

男爵 もうひとつの偶然……、何だね、それは。

探偵 まさに、あなたが銃を発射した瞬間にそれは起こったのです。そう、その瞬間にジャンがぶら下がっていたロープは、ジャンの重みで切れてしまったのです。

男爵 何だって、それなら私の銃弾はジャンのロープにはあたらないかったのか。

探偵 そうです。それこそが神が仕組んだ本当の偶然だったんです。偶然という神は、あの夜二度ジャンに働きかけ、一度目は奇跡を与え、二度目は死を与えたのです。

男爵 では、君はジャンは事故で死んだというのかね。

探偵 ジャンは木から落ちたんじゃない。塔に登って真実を見た瞬間にジャンの命は終わってたんです。

しばらく無言で塔を見上げる探偵と男爵。

探偵 僕は知っています。あなたがこのゲレの町にもたらした輝かしい業績を、そしてこれからもこの町にはあなたは必要な人だということも。さらにアスカレル家の遺族には、元のアスカレ

ル家の土地に値するだけの財産が、あなたから支払われるということ。それはこの土地を去られる夫人と令嬢に対するあなたの良心として……。男爵、令嬢はあなたとの結婚よりも、新しい土地で開かれた女性として生きることが望まれているようですよ。

男爵 ……、必ず君のいうとおりでしょう。

探偵 それじゃあ、これはもう必要ないでしょう。

いいながら、探偵が手にもつていた故アスカレル公爵の返済証書を小さくやぶいて窓の外に捨てる。だまって、それを見つめている男爵。

探偵 そうだ、ジャンの持っていたバイオリン。あれはあなたがジャンに贈られたそうですね。ストラディ・バリウスの名機。

男爵 ジャンはバイオリンの名手だった。小さいころ、よく私の屋敷で聞かせてくれたものだ。

探偵 ジャンの形見にあれを僕は譲れ受けることにしましたよ。

男爵 ホームズ君、君もバイオリンをひくのかね。

探偵 ええ、ジャンほどにはまだなっていないけどね。

男爵 ホームズ君、私はまだ君のファースト・ネームを聞いていなかった。

探偵 僕ですか、ぼくはジャーロック、そう、シャーロック・ホームズです。

いいながら、ホームズが入ってきた扉のほうに歩み去る。

溶暗。

## 7 ふたたび、ベーカー街

静かに明かりが入ると、そこは元のベーカー街、ホームズの居間兼書斎。

ワトソン やあ、大変だ。君の話に夢中になって、僕の患者たちがやってくる時間に遅れてしまったぞ。

ハドソン まあ、それは大変。そうだわ。私も早く私の絵に取り掛からないと、子供たちが私のピーター・ラビットが出来上がるのを待っているんだわ。

ワトソン じゃあ、ピーター・ラビットはもうすぐ出来上がるから

と子供たちに伝えますから辻馬車を一台、手配してください。  
ハドソン はいはい、あなたの大切な患者さんたちのために、すぐに手配しましょう。

言いながら、ハドソン夫人が部屋を出て行く。

ワトソン ホームズ、今の話はとても面白かったよ。しかし、本を書いたためには、一、三、残っている疑問を明らかにしておきたいんだ。

ホームズ 何だい。

ワトソン ガゼボン男爵の撃った弾丸は、本当にジャンのロープに命中しなかったんだらうか。ロープに弾痕が残らないよう細工するぐらいは君なら訳はないだらう。

ホームズ さあ、どうだらう。しかし、ガゼボン男爵の射撃の腕はほとんど神がかりだったそうだよ。

ワトソン もうひとつ、君が男爵に見せた公的証書というのは本当に本物だったのかい。君の得意の調査と推理であの塔の上に証書が隠されていることをつきとめたんじゃないのかい。

ホームズ 確かにジャンは調査と推理でそれを突き止めたのに違いないからね。だからこそ、ジャンはあの塔に登ることに執着したんだ。

ワトソン そうするとジャンは塔から降りるときに撃たれたんではなく、塔に登るときに撃たれたのかもかもしれないということかい。  
ホームズ どちらでもいいじゃないか、そんなことは。大切なことはジャンがあつた塔に登ることを夢見て、それを成し遂げたということだよ。だって、あの塔は今もあそこにあるじゃないか。三つ目の疑問は何だい。

ワトソン エリザベート・アスカレル嬢はその後、どうしたんだらう。彼女はあの土地を離れたんだらう。

ホームズ おや、君はまだ気がつかないのかい。彼女はさっきまでぼくたちの前に座っていたじゃないか。

窓の外に辻馬車の鐘の音が響いてくる。ホームズが立つて窓の外を見下ろしながら、

ホームズ ワトソン君、辻馬車がきたようだよ。

(幕)